

氏 名	宮 田 浩 みや た こう
学位の種類	医 学 博 士
学位記番号	論 医 博 第 219 号
学位授与の日付	昭 和 40 年 9 月 28 日
学位授与の要件	学 位 規 則 第 5 条 第 2 項 該 当
学位論文題目	Histological Changes of Spleen and Liver in Experimental Portal Hypertension Produced by Anti-Dog-Spleen Rabbit Serum (実験的門脈圧亢進症における肝および脾の態度)
論文調査委員	(主 査) 教 授 本 庄 一 夫 教 授 木 村 忠 司 教 授 伊 藤 鉄 夫

論 文 内 容 の 要 旨

所謂バンチ病の独立性については議論の多いところであるが、著者は実験的に脾組織を選択的に障害することを企て、その経過を観察し検討を加えた。

すなわち、犬脾ホモジネートで家兔を感作し、その血清（抗犬脾家兔血清）を犬に反復静注した。抗血清を静注された犬の全例に明らかな門脈圧の上昇が認められた。その上昇は可逆性であり、かつ同時の肝に組織変化が乏しいことから、少なくとも著者が観察した期間では門脈圧上昇機転として機能的なものを推察した。

門脈圧の上昇程度と肝変化には一定の関係を見出し得ず、必ずしも脾の組織学的変化とも平行関係を認めなかった。本実験でも実験月数のすすんだ例で肝線維化の初期と思われる例があったが、これも更に線維化がすすめば肝の血流抵抗増大をまねき、門脈圧上昇は不可逆性となり得るであろう。

観察期間では明らかな脾腫は認められなかったが、脾では初期には各種遊走細胞の増加、時には急性脾炎像を呈し、これがやがて形質細胞や細網細胞の増加に代り、遂に線維増生像ないし萎縮像をみるにいたる一定方向の変化を観察した。この脾における一連の所見は本実験の本質からみて持続的門脈圧上昇よりくる二次的な変化と考えることは困難であり、圧上昇にともなううっ血のみから前記変化がもたらされ得ないことは脾静脈結紮アルブミン感作家兔実験でも明らかである。

門脈圧の上昇とともに末梢血における血小板の著減は注目に値する。この減少はあたかも脾での反応に呼応しているかの如くである。

以上の得られた像はまさにバンチ病初期のものといえ得ると信ずる。かくの如き肝脾の組織変化はさらに同様の条件が持続すれば肝では肝の Fibrose に進行し、脾では Fibroadenie に進展する可能性を有するものであろうことは、一般に Fibroadenie と信じられている所見は脾炎の終末像であり、しかも原因の如何を問わないとされている点からも容易に想像される。

これに対し、正常家兔血清注射を反復した対照群では脾の変化は遊走細胞の増加程度にとどまり、実験

群のそれとは質的にも量的にも明らかな差異を示した。もちろん末梢血での血小板も変動をみなかった。

著者の実験では脾がバンチ病の主変化を構成し得ることを証明できたと同時に、得られた門脈圧亢進が肝における機能的機序でおこっていると思われる。

本実験でバンチ病が脾原発性あるいは肝脾原発性に成立し得るものであることが判明したと信ずる。

論文審査の結果の要旨

いわゆるバンチ氏病の独立性については未だ定説がない。著者は実験的に脾組織を選択的に障害することとを企て、その経過を観察した。

すなわち、犬脾ホモジネートを抗原として家兎を感作し、得た血清を犬に週1回反復静注することによって、全例に門脈圧の上昇を認めた。この上昇は可逆性であり、同時に観察された肝には組織学的に変化が乏しい。すくなくとも著者が観察した期間では門脈圧上昇機転として機能的なものがまず考えられる。

門脈圧の上昇とともに、末梢血中の赤血球、血色素は減少傾向を示し、とくに血小板は著明に減少する。

門脈圧上昇持続犬の脾は、初期に脾炎像とも称すべき各種遊走細胞の増加を示し、ついで形質、細網反応がこれに代り、ついに線維増生性変化をていする。肝の変化は脾の変化とかならずしも並行しないが、長期観察例では線維化への進展が推測される。

かくしてバンチ氏病は脾原発性あるいは肝脾原発性に成立し得るもので、独立疾患としての意義を有するものと考えられる。

以上、著者の成績はバンチ氏病の成因に関し、じゅうらいみられる以上の明快な説明を与えたものである。

本論文は学術上有益にして医学博士の学位論文として価値あるものと認定する。